

こちら 子どもスポーツ診療室



⑩

スポーツに取り組み10代の子どもたちは、身長もぐんぐん伸びる成長期にある。スポーツには、けがが付きものだが、膝や肩、太ももの付け根などの痛みや腫れが長引くようなら、骨や筋肉の腫瘍を疑うことも必要だろう。腫瘍ができるのはまれなケースだが、悪性だと命に関わることもある。徳島大学大学院運動機能外科学の西庄俊彦講師に、腫瘍の特徴や治療法について聞いた。



西庄俊彦講師

悪性には化学療法導入

骨にできる腫瘍を骨腫瘍といい、育ち盛りの10代に発症しやすい骨肉腫は代表的な悪性骨腫瘍だ。一方、筋肉や血管などにできるものを軟部腫瘍という。骨腫瘍は痛みを伴って発症することが多く、軟部腫瘍は痛みのない腫瘍として見つかることが少なくない。これ

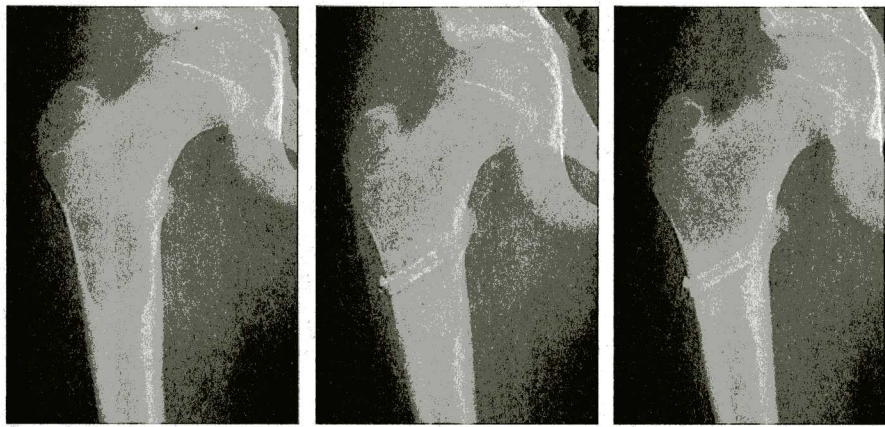
ら腫瘍の多くは、原因がはっきりと分かっていない。「腫瘍性疾患の当初の症状はけがや障害と似ており、打撲や炎症と見分けがつきづらいケースもある」と言う西庄講師。「なかなか症状が取れにくいときは、単純エックス線写真や磁気共鳴画像装置(MRI)で撮影して確認する必要がある」と指摘する。

腫瘍のうち、骨肉腫やユイソウ肉腫、横紋筋肉腫など悪性のもものは、身体機能のほかに、命までも失う恐れがある。ただ、悪性の骨・軟部腫瘍の発症率は極めて低く、米国のデータでは10万人に2・8人(年間)の割合となっている。近年は、これら悪性腫瘍に化学療法が導入されて成果を挙げており、子どもは小児科と協力して治療にあたるケースが多い。外科手術で骨を切除した場合でも、人工関節を入れることで発症部位のある腕や足などを切断せずに済むことが少なくない。

徳島大では空洞部に人工骨を詰め、そこに人工骨でできた性質のものよりは発症率が高いが、命に関わる取り組んでいる。一方、良性腫瘍は悪性を防ぐための治療に「骨・軟部腫瘍の発症はまれで、痛みが続いても悪性疾患の可能性は低い。心配し過ぎる必要はない」と話す西庄講師。「ただ、比較的症例数が多い「単純エックス線」は骨の中にあるケースでは、腫瘍性に空気ができ、水がたまる疾患。放置すると骨自体が弱くなるために精密検査を受けて「骨折を引き起こすほしい」と呼び掛けている。再発も少なくな

(萬木竜一郎)

骨・軟部腫瘍



術前

術後1カ月

術後8カ月

10代男性の左大腿(だいたい)骨にできた単発性骨腫瘍の術前、術後のエックス線写真(徳島大提供)